

氏 名	すぎもと あつ のり 杉 本 厚 典
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 246 号
学位授与の日付	平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学位論文題目	河内における弥生時代後期から古墳時代にかけての地域社会の動態

(主 査)
論文調査委員 教 授 上 原 真 人 教 授 鎌 田 元 一 助教授 吉 井 秀 夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、河内における弥生時代後期から古墳時代の地域社会の動向を、近年明らかになった考古資料をもとに再構成し、いわゆる「階級社会」の形成過程、「初期国家」出現期の様相を具体的に解明しようとしたものである。論文は序章、第1～3章、終章から成る。序章は論文の目的、終章はまとめと展望なので、以下、第1～3章の各内容を要約する。

第1章では、河内における弥生時代中期末から古墳時代前期末の土器編年を再検討する。とくに出土量が多く、形態が豊富な甕と高杯を基準に型式を設定し、その組合せと共伴した一括資料から、弥生時代中期末から古墳時代前期までの土器を、34型式期14段階に細分した。弥生後期以降の各段階の特徴を以下に列記する。

弥生時代後期初頭（3～5期）：長頸壺，細頸壺，広口壺の出現

前葉（6～9期）：中型器台の出現

中葉（10～12期）：二重口縁壺，椀形高杯の出現

後葉（13～15期）：手焙形土器，近江系鉢，加飾直口壺の出現

末（16～18期）：大型・小型直口壺の出現

庄内式期 古段階（19～21期）：定型化する以前の小型無孔器台の出現

中段階（22・23期）：定型化した小型無孔器台の出現

新段階（24・25期）：定型化した小型丸底壺，丸底の有段口縁鉢・外折口縁鉢の出現

布留式期 古段階（26・27期）：山陰系器台，山陰系大型鉢の出現

中段階（28～30期）：小型無孔器台の出現

新段階（31～33期）：有段鉢，小型無孔器台の消滅

須恵器出現期（34期）：須恵器の出現

上記の時期区分を基準に、共伴した外来系土器から、細分が進んでいる東海・吉備・山陰地方における庄内式期～布留式期土器編年との、時間的な併行関係を検討する。東海地方は27期が廻間Ⅲ式1段階，29期が廻間Ⅲ式4段階，33期が松河戸式新段階にそれぞれ併行する。また、吉備地域は26期がXc期，28期がXe期に，山陰地方は29期が青木Ⅶ期古段階新相，32・33期が青木Ⅶ期に併行する。

河内出土の外来系土器は、各時期によって特徴がある。すなわち、弥生時代中期前～中葉には紀伊・近江，中期末～後期前葉には中部瀬戸内，後期後葉には近江，後期末～庄内式期古段階には吉備，庄内式期新段階～布留式期には東海・山陰地域からの外来系土器がそれぞれ多いのである。これらの外来系土器は、在地における新たな土器形式の生成に影響した。後期前葉の長頸壺や広口壺，後期後葉の小型鉢・手焙形土器，布留式期の小型有孔器台などには、それぞれ吉備系，近江系，山陰系の影響が指摘できる。吉備系の影響が説かれている庄内～布留式期ヨコミガキ器種群以外にも，外来系土器の影響で出現する形式は多いのである。また，布留式期の小型S字口縁甕や小型鼓形器台など，外来系との折衷形式の土器もある。

このような土器が生まれる背景として、土器制作の場在地系と外来系の技術伝統がともに投影される状況が想定でき、そこには移住等の人的交流があったと考えられる。

第2章では、中河内の地域社会の変遷を検討した。弥生時代中期の大規模集落である亀井遺跡においては、水よけとして掘削した多数の溝に守られた微高地上に掘立柱建物群が、微高地の斜面に墳墓が、北の低地に水田がそれぞれ営まれていた。集落内では各種手工業生産がなされ、外来系土器や分銅形土製品の存在が示すように他地域との交流が盛んであった。また、ト骨・銅鐸の破片や鐸形土製品が多数出土し、祭祀や葬送儀礼に欠かせない朱の加工・精製もなされていた。これらの現象は周辺の諸集落では確認できず、亀井遺跡がこの地域における手工業生産や宗教的行事・祭祀の中核であったことがわかる。亀井遺跡には、集落に接する墳墓以外に、やや離れた場所にも墓域があり、埋葬施設における朱の使用、墓上での土器の供献、墓域から出土する動物骨など、居住域に近接した墳墓において、手厚い葬送儀礼が認められる傾向があり、そこに階層差が指摘できる。

一方、亀井遺跡周辺の長原遺跡では、数基の堅穴住居からなる居住単位が「出戸自然堤防」上に分散し、跡部遺跡でも小規模な居住域が認められた。これらの集団は平野川沿いの沖積地で水田を営んでいた。また、八尾南遺跡では灌漑水路を掘削し、小支谷を利用した水田開発が進展した。水路掘削などの協業が随時なされたとしても、集住ではなく小単位が分散して居住する姿が看取できる。このように、弥生時代中期には、集住性の高い集落と、小集団が分散して居住する集落とがあり、いずれも水田経営に適した場所を占拠していた。そして、前者が地域における手工業生産、祭祀、交流の拠点的作用を果たしていたのである。

弥生時代後期には亀井遺跡は衰退し、拠点集落がなくなる。集落の北に広がる水田が頻発する洪水で被災し、後期後葉以降、居住域であった場所のほぼ中央に河川が流れるようになったことが、衰退の直接の原因である。弥生時代中期の亀井遺跡が担っていた役割のうち、青銅器生産は淀川流域に中核が移り、より生産・流通に適した場所で集中的に行われるようになった。後期中～後葉には外来系土器は少なく、地域間交流は不活発であったと推測できる。弥生時代後期における居住形態は、堅穴住居数基からなる小単位が中心である。堅穴住居には溝や土堤をめぐらせて、視覚的な独自性を明示したものもある。この時期には沖積地の水田開発が盛んで、長原遺跡東北地区や加美・久宝寺遺跡に水田が分布し、八尾南遺跡でも小支谷から沖積地における水田経営に移行する。分散して居住していても、小集団間には水田経営をめぐる協働があったと推測されるが、その経営の安定度が増すことで小集団の自立性も高まったと考えられる。

庄内式期から布留式期になると、久宝寺から加美遺跡にかけて、新たな大型集落が形成される。数棟の堅穴住居からなる居住域が、自然堤防上の微高地に150～200m間隔で点在する。多くの場合、居住域に墓域が隣接する。加美・久宝寺・亀井北遺跡は、亀井遺跡の衰退、跡部遺跡の北への移動と連動して成立する。搬入土器や在地で変容した土器があることから、他地域から人が移住した可能性もある。もともと久宝寺に居住していた小規模な集団に、亀井・跡部から転出した集団が入り、さらに外部地域の人々が加わり、集落が構成されたと見られる。これらの集団は、周辺の低所部で水田を営み、高所部では居住域や墓域の周辺から谷の斜面にかけて畠を耕作した。活発な生産活動を通じて諸集団は協働し、密接な関係を築き上げた。

古墳時代中期になると、掘立柱建物からなる集落が、久宝寺・長原・八尾南に出現する。なかでも長原遺跡では、溝で区画した敷地内に、独立棟持柱建物や倉庫群が整然と配されている。一方、八尾南遺跡には区画溝がなく、掘立柱建物と倉庫を備え、居住域に隣接して古墳を築く場合と、堅穴住居を主体として倉庫を伴う場合、倉庫を伴わない場合がある。この違いは集落立地と関連し、倉庫のない居住域は沖積地内の微高地上に、堅穴住居・掘立柱建物・倉庫で構成される居住域は瓜破台地と沖積地の間の丘陵上に位置していた。これに対して、おもに掘立柱建物で構成される居住域は、はじめ沖積地に近い場所に形成されるが、古墳時代中期後半には水田域から離れ、長原古墳群がある台地上へ移動する。区画溝を持つ掘立柱建物群からなる集落は倉庫を多く持つことから、生産に直接携わった集団ではなく、生産物を集約・管理し、流通に関わっていた可能性が高い。

第3章では、弥生時代中期の墳墓を概観した後、弥生時代後期から布留式期にかけての墳墓を、出土土器で編年した。この成果をもとに、墓地の構成、小児の埋葬、庄内～布留式期の階層性の実態を検討した。

弥生時代後期初頭から中葉は多数埋葬が一般的で、埋葬主体を集中的に配置する場合と、規則的に配置する場合とがある。

後者には、いわゆる標石を持つものが多い。祭祀用土器と日常土器の区別は、焼成後、前者の胴部に穿孔する以外は不明確である。供献土器は墓坑の肩部に置く。副葬品はガラス玉などの装飾品があるが限られている。方形周溝墓は大規模集落に隣接し、中期以来の墓域内にあるものと、集落から離れて、単独で築かれるものがある。

弥生時代後期末から布留式期には、1～2基の少数埋葬が一般的となる。庄内式期古・中段階の祭祀には日常土器を用いるが、底部に穿孔するものがある。土器の廃棄場所は周溝内である。これに対して、庄内式期新段階～布留式期には、精製土器（小型丸底壺と小型器台）や祭祀専用の焼成前底部穿孔二重口縁壺をおもに用いる。墳丘上に土器を配列することもある。土器の廃棄場所には、墳頂の主体部周辺に穴を掘って埋める場合、陸橋部付近や墳墓外縁などに捨てる場合などがある。供献土器は墓坑内に甕を置く例がある。鏡片を副葬する場合は稀にある。集落に隣接する方形周溝墓群と、集落から離れて単独で築かれる古墳とが明確に区別できる。

棺の形態と被葬者の年齢には、胎児・乳児が土器棺、3～12歳は小型木棺、12歳以上が100cm以上の木棺という相関性が想定できる。弥生時代中期から後期前半の小型木棺には、方形周溝墓の中心主体となるものがあるが、土器棺が埋葬の中心を占めるものはない。また、小型木棺は他の木棺と共に規則配置する例が多い。これに対して、土器棺墓は墳丘縁辺部に列状に配されることがあっても、他の木棺墓と共に規則配置される場合は少ない。乳幼児埋葬は女性の埋葬に近接することが多く、血縁的つながりが埋葬原理に強く反映されたと推定できる。これに対し、小型木棺墓のあり方は、小児に年齢組のような社会的役割が与えられていたことを示す。

庄内～布留式期には、小型木棺墓や土器棺墓は墳丘上から姿を消し、特定の方形周溝墓近辺に立地する例が増加する。また、土器棺墓群が集塊状に方形周溝墓群の外や居住域縁辺に設けられることもある。小型木棺墓や土器棺墓に、方形周溝墓とは別の埋葬原理が作用したのである。成人の単数埋葬が主流となり、乳幼児や小児埋葬が疎外されたのは、当時の村落が成人中心の社会構成であったこと示す。

庄内～布留式期における各集落の墳墓を比較すると、東郷遺跡の方形周溝墓が一辺10mを超すのに、加美遺跡では10mに満たないものが多い。これを東郷遺跡集落が加美遺跡集落の上位にあるものと捉えてきたが、墳墓面積の累積頻度を比較すると、東郷遺跡の墓が一樣に大きいのに、加美・久宝寺遺跡では階層化が進展している事実が看取できる。先述のように、加美・久宝寺遺跡は東郷遺跡に比べて外来系土器が多く、各種系統の集団を取り入れて集落を形成したと考えられる。また、方形周溝墓から小児埋葬を疎外する埋葬原理を貫徹しており、出自も系統も異なる諸集団が共存し、成人中心の秩序ある社会を構成するために、各小集団内や間に複雑な階層性を発達させたと思われる。折しも、玉手山丘陵上には、玉手山9号墳や松岳山古墳など前期古墳が営まれ、河内に成層化した地域社会が生まれようとしていた。

論文審査の結果の要旨

バブル崩壊後は下降線をたどりつつあるとはいえ、昭和40年代以降の、山を削り、谷を埋め、原風景を一変させる日本国土の開発行為にともなって、膨大な遺跡が発掘され、日本の考古資料は飛躍的に増大した。「世紀の発見」がマスコミにぎわせ、毎年、日本全体で1000を超える遺跡の発掘調査報告書が公刊されているにもかかわらず、そうした資料を駆使した総合的な新たな地域像、歴史像が提示されることはさきわめて少ない。情報の洪水の中で、資料をじっくり見つけ、整理し、歴史像を組み立てる余裕がなくなっているのが現状なのである。本論文は、そのような状況を打開し、最新かつ膨大な考古資料にもとづいて、弥生時代後期から古墳時代、すなわち従来から初期国家が誕生したとされる時期の動向を、河内という地域を選んで土器、集落、墳墓の三面から詳細に追求した力作である。

第1章では、従来の土器編年を踏まえつつ、甕の製作技法と高杯の形態にもとづいて独自に設定した型式とその組み合わせ、および共伴した一括資料から、弥生時代中期末から古墳時代前期にかけての土器を34期14段階に細分し、山陰、吉備、東海地方との併行関係を検討する。基準となる時間軸の設定と、地域間の影響関係や相互作用を解明する基礎作業である。この作業を通じて、河内の在地土器における新形式の生成に外来系土器が影響した事実、すなわち各地からの移住者を含む地域間交流が明確にされた。

第2章では、中河内における5カ所の集落遺跡をとりあげて、居住域、水田域・生産域、墓域などの構造が、弥生、古墳時代を通じてどのように変遷したのかを検討する。従来、拠点集落・周辺集落と抽象的に概念化されていた弥生集落の構造

を、構成する諸施設とその機能の時期変遷として、具体的に描きだす試みである。一見すると、発掘で判明した事実の羅列にも見えるが、複数の調査機関が関与した何層にもわたる断片的発掘成果を総合して、各時代ごとの集落構造を明らかにする作業には、気の遠くなるような労力と根気を必要とする。論者はそれを見事にこなしている。とくに、弥生時代中期に成立した拠点集落（＝亀井遺跡）と周辺集落（＝長原遺跡、八尾南遺跡など）の居住形態や保有する諸施設の違い。その階層差が弥生時代後期に一旦解体して、庄内式期の再編を経て、古墳時代中期には生産物を集約し管理する長原遺跡を頂点とする集落の階層構成が確立する過程は、新たに提起された地域史像として、今後さらなる検討が期待される点である。

第3章では、墳丘形態や規模・構造、出土土器、副葬品、墓域構成などの属性にもとづいて、河内における弥生時代中期末から布留式期の墳墓の変遷を具体的に追求している。とくに、弥生時代中期～後期前半の方形周溝墓における小型木棺＝小児棺と土器棺＝乳幼児棺の存在形態の違いから、すでに小児に社会的役割が与えられていたこと、庄内～布留式期になると、墳丘上から小型木棺墓や土器棺が疎外され、成人を中心とした社会構成に再編されたこと、方形周溝墓における面積の累積頻度から、集落によって階層化に格差のある事実など、新見解が提示されている。

このように古墳発生前後における河内地域の集落の変遷や社会構成の動向を描くために、論者が引用した遺跡の報告書や研究論文は1000編を超える。その物理量にもかかわらず、分析は細やかで、発掘で解明された事実在即して叙述がなされる。論者が土器様式で細分した小時期は、その分析の大きな成果ではあるが、それが本論文の欠陥にもなっている。時代名称なしに歴史叙述はできない。弥生・古墳時代を前・中・後期に、そして各期を初頭・前葉・中葉・後葉・末期に区分した上で、集落や墓制の変遷が語られる。しかし、土器様式で細分された小時期を、大枠の時代名称で括って遺構に即して叙述するには、枠からはみ出す部分が生じる。弥生・古墳時代の過渡期である庄内式期が、あるときは古墳時代前期の枠内で、ある時はその枠外で語られるのはその顕著な例である。しかし、これは現在の弥生～古墳時代研究自体が抱え込んだ欠陥であり、論者自身もそれを克服しきれなかったことを示すにすぎない。論者の方法や成果が河内地域以外にも応用され、さらに広範な地域で、土器、集落、墳墓の相関的な変遷がたどれるようになれば、こうした矛盾は解消していくに違いない。本論文の欠陥は、そのまま将来への新たなステップとなるはずである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2003年2月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。